

「ツアラアトの十人」

ルカの福音書 17:11～19

はじめに

イエシュアは弟子たちに対して「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されている（ルカ 8:10）」と言われました。前回もお伝えしましたがこの「奥義」のことをヘブル語でソード(ΤΙΘ)と言います。これが聖書で最初に使われた箇所に、奥義が誰でも入れるもの、誰でも容易に理解するということができなものであるという性質が示されています。

創世記【新改訳 2017】

49:5 シメオンとレビとは兄弟、彼らの剣は暴虐の武器。

49:6 わがたましいよ、彼らの密議に加わるな。わが栄光よ、彼らの集いに連なるな。 彼らは怒りに任せて人を殺し、思いのままに牛の足の筋を切った。

49:7 のろわれよ、彼らの激しい怒り、彼らの凄まじい憤りは。私はヤコブの中で彼らを引き裂き、イスラエルの中に散らそう。

これはヤコブがその晩年、息子のシメオンとレビについて預言した箇所です。「わがたましいよ、彼らの密議に加わるな」と訳されているのが本来の「奥義」ソードです。この預言は一見シメオンとレビを非難しているように見えて、実は「たましい」ではこの密議に、奥義に入れない、知りえないという真理を伝えてもいるのです。このシメオンとレビの起こした出来事をいわゆる悪事、悪だくみとして捉えているならばそれはまさに「たましい」による解釈であり「奥義」を知るにいたりません。なぜならこれに入るには「たましい」ではなく「霊」ルーアツハ、神の「霊」御霊、聖霊の助けが必要だからです。この霊とは「これから起こることを伝える（ヨハネ 16:13）」というものだといエシュアは言われ、イエシュアが復活された後に弟子たちに注がれました。この霊でなければ、この霊によってでなければ「奥義」を知ることはいたらず、そしてその内容はイエシュアの復活、昇天の後に「これから起こることを指し、それは究極的には終わりに起こること、世の終わりに起こる神のご計画を指し示しているのです。

またそれは「わが栄光よ、彼らの集いに連なるな」とも言い換えられています。「わが栄光」とは神の栄光ではなく自分の栄光、自分の功績、つまり人の働き、人の手によるものです。「奥義」とは神の栄光であり、神のご計画にしたがってご自身が成し遂げられるものであり、人の手、人の知恵や力によるものではありません。その事実がここには預言されているのです。まさに「主が家を建てるのでなければ建てる者の働きはむなしい（詩 127:1）」とあるとおりです。

このように、「奥義」ソードとは本来、この言葉自体そのものが終わりの日に主ご自身が成し遂げられる神のご計画を指しており、そしてそれを知る、理解するためには「たましい」によってではなく「霊」によって聖書を読む、霊による聖書解釈が必須なのです。

この預言にあるシメオンとレビについての創世記 34 章の出来事は、一見狡猾で残忍な者たちの悪事というような印象を受けます。しかしこの時この二人が立ち上がらなければヤコブの娘ディナも、ひいてはヤコブの家全体もシェケム（背を向ける、背くという意味）という異邦人の家に飲み込まれていたのです（創 34:23）。つまり彼ら二人はイスラエルの家とその血統を守り、そればかりでなく略奪という形ではありましたが逆に多くの異邦人をイスラエルの家に取り込んだのです。そのような視点でぜひ創世記 34 章を改めて読んでみてください。するとそこには終わりの日、イスラエルの残りの者が立ち上がり、大勢の諸国の民を反キリストの支配から奪い返し、イエシュアをメシアとする信仰に、そして救いに導くというその「型」が見えてくるのです。そしてこれを「**のろわれよ**」と言ったヤコブの預言が、「御怒りの日」とも呼ばれる世の終りの大患難の中に置かれるというその事実を指していることに気づくのです。そのようなシメオンとレビの「**密議**」それがソード「奥義」なのです。

ちなみに兄のシメオンは「**神の声を聞く**」という意味の名で、弟レビは神と民を「結ぶ」イスラエルの祭司の部族の長です。つまり神の御声、御言葉に聞き従う祭司たちの「**密議**」、たましいではなく神の「**霊**」によってそれを知る、それが神の国のソード「奥義」なのです。このように、「奥義」ソードという言葉自体がそもそもイスラエルの残りの者を、それを用いられる終わりの日の神のご計画を指しているのです。つまり終わりの日に「恵みと嘆願の霊」が注がれ、「額に神の印」が押されるイスラエルの残りの者を指し示さない「神の国の奥義」などはありえないということになるのです。このような視点、理解を持ちつつ、今日もイエシュアについての御言葉から「神の国の奥義」をお伝えしたいと思います。願わくは語る者と聞く者、ともに真理の御霊、聖霊の助けがありますように。

1. エルサレム

ルカの福音書【新改訳 2017】

17:11 さて、イエスはエルサレムに向かう途中、サマリアとガリラヤの境を通られた。

17:12 ある村に入ると、ツアラアトに冒された十人の人がイエスを出迎えた。彼らは遠く離れたところに立ち、

17:13 声を張り上げて、「イエス様、先生、私たちがあわれんでください」と言った。

17:14 イエスはこれを見て彼らに言われた。「行って、自分のからだを祭司に見せなさい。」すると彼らは行く途中できよめられた。

17:15 そのうちの一人は、自分が癒やされたことが分かると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、

17:16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人であった。

17:17 すると、イエスは言われた。「十人きよめられたのではなかったか。九人はどこにいるのか。」

17:18 この他国人のほかに、神をあがめるために戻って来た者はいなかったのか。」

17:19 それからイエスはその人に言われた。「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」

これはイエシュアが十人のツアラアト患者をきよめられたという出来事です。この出来事についての記述に秘められた神の国の奥義を見てまいりましょう。

まず「**イエスはエルサレムに向かう途中**」とあります。状況としては十字架にかかれるためにエルサレムを目指しておられることとなりますが、イエシュアの眼差し、その視点の先にあるエルサレムとはご自分が十字架にかけられるエルサレムではないことが同じくルカが記している以下の御言葉からわかります。

ルカの福音書【新改訳 2017】

23:27 民衆や、イエスのことを嘆き悲しむ女たちが大きな一群をなして、イエスの後について行った。

23:28 イエスは彼女たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい。

23:29 なぜなら人々が、『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来るのですから。

これはイエシュアがいよいよ十字架にかかれて死なれるその直前のものです。そのような状況においてイエシュアは「**エルサレムの娘たち**」と声をかけられ、やがて「**自分自身と、自分の子どもたち**」の上起こる悲劇、患難に目をとめるように教えておられます。それは A.D70 年にエルサレムがローマによって攻め滅ぼされること、そして究極的には終わりの日、獣と呼ばれる反キリストが自らを神とし、エルサレムを自分の神殿としてこれを奪うことを指しておられるのです。このようにイエシュアのエルサレムに対する眼差しは終わりの日、大患難と呼ばれる時代におけるそれに向けられているのです。

2. きよめる

そのようなイエシュアが「**サマリアとガリラヤの境**」にある村に入られたとあり、ここにツアラアトに冒された十人の人が登場します。この人たちは「**サマリアとガリラヤの境**」という村の立地から、サマリア人とガリラヤ（に住むユダヤ）人つまり異邦人とイスラエルが共生している集団であると推察できます。これはユダヤ人たちがサマリア人を悪霊と呼んで一切つき合いをしなかった当時の情勢（ヨハネ 4:9、8:48）からは普通ありえない集団です。そしてその人数の内訳はユダヤ人が九人、サマリア人が一人であったと考えられますが、いずれもイエシュアの名を呼び求め、そのあわれみによってみなが等しくきよめられていることから、彼ら十人はみなイエシュアに対する信仰を持っていた者たちであると言えます。

そんな十人に対してイエシュアは「**行って、自分のからだを祭司に見せなさい**」と言われ、そして「**彼らは行く途中できよめられた**」とあります。ここに使われている「きよめる」という意味のターヘル (קָטַף) は本来、単なる病いの癒しではなく、偶像を捨て、主にのみ仕え、ベテルすなわち神の家、神の国に住むために「**身をきよめ**」ることを意味する言葉です。

創世記【新改訳 2017】

35:1 神はヤコブに仰せられた。「**立って、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウから逃れたとき、あなたに現れた神のために祭壇を築きなさい。**」

35:2 それで、ヤコブは自分の家族と、自分と一緒にいるすべての者に言った。「**あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、身をきよめ、衣を着替えなさい。**」

このように、ヤコブすなわちイスラエルの民が「神の国」千年王国、メシア王国とも呼ばれる御国に住むことようになることを指し示す言葉、それが「きよめる」ターヘルに秘められた神の国の奥義です。

するとここでサマリア人だけが一人、ユダヤ人たちから分かれてイエシュアのみもとに帰って来たとなります。このサマリア人は「**大声で神をほめたたえながら引き返して来て…イエスの足もとにひれ伏して感謝した**」とあり、この箇所から主に感謝し、賛美することは良いことだというような勧めがなされることがありますが、そうすると引き返して来なかったユダヤ人たちは、感謝の心のない悪い者たち、劣った信者たちということになります。述べたとおり彼ら九人のユダヤ人も確かにイエシュアに対する信仰を持ち、等しくきよめられたのです。ですからこの両者を優劣で比較し、さばくべきではありません。何より九人のユダヤ人たちは「**行って、自分のからだを祭司に見せなさい**」と言われたイエシュアの御言葉に聞き従ったのです。そして何よりレビ記 14 章に記された祭司によってなされる「ツアラアトに冒された者がきよめられる時のおしえ」に則した行動と取ったのです。モーセの律法、御言葉に対する忠実さという点において見るならば、この九人のユダヤ人たちには決して誤りはなく、彼らに責められるところはありません。彼らには感謝の心がない、などという解釈は、実に人間的でまさに「たましい」の解釈です。

「霊」によってすなわち「神の国の奥義」としてこの出来事を見るならば、この九人のユダヤ人たちは、イエシュアを信じ、なおかつモーセの律法にも従うという彼らはまさに終わりの日に起こるユダヤ人、イスラエルの残りの者を指し示すその「型」です。また終わりの日に現れる獣、反キリストは全世界を支配し、その世界からユダヤ人は迫害され排斥されますが、それがまさにこのツアラアトを患い、社会から隔離、隔離され「**サマリアとガリラヤの境**」すなわちどの民族からも隅に追いやられたというこの十人の人々には表されているのです。

そしてその中から一人、イエシュアのみもとに引き返したサマリア人とは、イスラエルの残りの者の宣教の働きによって御国の福音を聞き、メシアであるイエシュアを信じる異邦人「**だれも数えきれないほどの大勢の群衆**」を指し示す「型」です。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:10 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

7:11 御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物の周りに立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を礼拝して言った。

7:12 「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、私たちの神に世々限りなくあるように。アーメン。」

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそぞ存じです」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」

この「だれも数えきれないほどの大勢の群衆」は「大きな患難を経てきた者たち」すなわちイエシュアを信じたがゆえに反キリストに殺される殉教者たちです。イスラエルの残りの者は大患難の中を最後までまさに生き残りますが、この大勢の群衆は死んでよみがえり、そのうえで天の子羊の御座に、まさにイエシュアのみもとに帰されます。ちなみにツアラアトはターヘル「きよめられる」とあるのですが、このサマリア人だけは「自分が癒やされたことが分かると」とあり、ここだけは「癒す」という意味のラーファー(אֲרָפָה)が使われているのです。この言葉の初出箇所をぜひ見てください。

創世記【新改訳 2017】

20:17 そこで、アブラハムは神に祈った。神は、アビメレクとその妻、また女奴隷たちを癒やされたので、彼らは再び子を産むようになった。

アブラハムの祈りによって異邦人アビメレクの女たちがラーファー「癒やされ」、その結果「再び子を産む」ようになる、つまり「再び生まれる」ようになるというこの出来事、これは子孫が増えるという意味ではなく、異邦人が再び新しく生まれるということ、すなわちよみがえり、復活を意味することを指し示す預言的な出来事であり、ここに聖書で最初のラーファーがあるのです。それが「きよめられた」だけでなく「癒やされた」ともあるこのサマリア人にのみ表された、異邦人「大勢の群衆」が大患難の中で死に、しかし再び生まれる、すなわちよみがえらされるという神のご計画がここには秘められているのです。そして彼らは天の御座、子羊イエシュアの御前にまで引き上げられ、そして「大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」」とあり、この姿が「大声で神をほめたたえながら引き返して来て…イエスの足もとにひれ伏して感謝した」というサマリア人の姿と見事に重なるのです。このように、このユダヤ人とサマリア人からなるツアラアトの十人を通してなされたイエシュアの御業にもやはり終わりの日の神のご計画が、神の霊によって成し遂げられる、その大いなる救いの御業が表されているのです。

3. 十分の一

またこの「十人のうち一人がイエシュアのみもとに帰る」という出来事に見られるこの「型」は、以下の教えにある主への「十分の一のささげもの」を指し示すものとも言えます。

レビ記【新改訳 2017】

27:30 地の十分の一は、地の産物であれ木の実であれ、すべて主のものである。それは主の聖なるものである。

マラキ書【新改訳 2017】

3:10 十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしを試してみよ。——万軍の主は言われる——わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか。

このように「十分の一」とは主がこの地にあるものを聖別し、そしてこの地に「あふれるばかりの祝福」を注ぐことを指し示すものであることがわかります。つまり主は、イエシュアはこのツアラアトの十人を用いてご自身が地を治め、地を祝福するというご計画をお持ちであることを示されたのです。

そしてこの十分の一のささげものを聖書で最初に行ったのはイスラエルの父祖アブラムです。以下の記述を見てください。

創世記【新改訳 2017】

14:5 そして十四年目に、ケドルラオメルと彼に味方する王たちがやって来て…

14:11 …ソドムとゴモラのすべての財産とすべての食糧を奪って行った。

14:12 また彼らは、アブラムの甥のロトとその財産も奪って行った。ロトはソドムに住んでいた。

14:14 アブラムは、自分の親類の者が捕虜になったことを聞き、彼の家で生まれて訓練された者三百十八人を引き連れて、ダンまで追跡した。

14:15 夜、アブラムとそのしもべたちは分かれて彼らを攻め、彼らを打ち破り、ダマスコの北にあるホバまで追跡した。

14:16 そして、アブラムはすべての財産を取り戻し、親類のロトとその財産、それに女たちやほかの人々も取り戻した。

14:18 また、サレムの王メルキゼデクは、パンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。

14:19 彼はアブラムを祝福して言った。「アブラムに祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より。

14:20 いと高き神に誉れあれ。あなたの敵をあなたの手に渡された方に。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。

アブラムは当時の支配者たちと戦い、ソドムやゴモラ、そして甥のロトの財産を奪い返しました。このようにアブラムは自分のものではないもののために戦い、自分が奪われたものではないものを奪い返し、その「十分の一」をささげたのです。つまり異邦人のために戦い、その異邦人の中から勝ち取ったものを、その「十分の一」をいと高き神にささげたのです。このような戦いが世の終わりにおいてアブラムの子孫、イスラエルの残りの者によって行われます。彼らは「だれも数えきれないほどの大勢の群衆」を御座の子羊イエシュアにささげるために信仰の戦い、宣教の戦いを行います。その事実が、そのような神のご計画がこのツアラアトの十人の出来事には奥義として表されているのです。

このように、イエシュアは終わりの日におけるエルサレムを見つめながら、この「ツアラアトの十人」を用い、これを大患難を生き残るイスラエルの残りの者と、その中で死んでよみがえる大勢の群衆の存在を指し示し、そこになされる神のご計画をお示しになったのです。そしてそれはいと高き神の祭司であったメルキゼデクになぞらえたメシア・イエシュアご自身によって、アブラムの家イスラエルの民が祝福され、それによってこの地全体が祝福されるという神のご計画を指し示したものでありました。

4. 友

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

15:15 わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。

今日、主は私たちをしもべではなく友と呼んでおられると信じます。しもべは「主人が何をするのか」主人の計画を知らないからです。今日も確かに主は私たちにご自身の計画を、秘められた奥義を開き、これを知らせてくださいました。これはおそらく私たちの今の現状、日常からはほど遠い、関りのない話だと感じてしまうことでしょう。しかし私たちの主は確かにこのようなご計画をお持ちで、これを成し遂げようと今日も働いておられるのです。そしてそれを知らせることで、その秘密を打ち明けることで私たちに対する友情、愛情を表現しておられるのです。ですからこれらの奥義を知らされた私たちは、理解できるかできないかということだけでなく神に愛されていること、選ばれていることをまず覚えていただきたいのです。そしてその愛を受けて、私たちがすべきことはその愛を分かち合うこと、愛し合うことです。しかしそれは一般的な人間的な愛情表現のそれではなく、今述べたように神の私たちに対する愛の表現である、神が友である私たちに知らせてくださっているそのご計画について語り合い、分かち合うことです。今日、私たちはそれを行うことができます。互いに愛し合ひましょう。